
いつか、空を飛ぶ夢

ぷりてい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか、空を飛ぶ夢

【Nコード】

N8371X

【作者名】

ぷりてい

【あらすじ】

ただただ平凡な高校生、目黒苦楽は悩んでいた。

子供の頃のような大きな夢なんて、とうの昔に諦めている。

かといって、他に熱望する進路や夢も無く、白紙の進路調査用紙を提出できずにいた。

そんな中、ひよんなことから車椅子の少女、高坂藍に出会う。

強気で意地っ張りだが、どこか放っておけない少女とのふれあいの中、苦楽の心は少しずつ変わっていく。

そしてある日、藍の「空を飛びたい」という夢を聞き、苦楽は自分

。の夢を見つけ出し、長い間白紙だった進路調査用紙と向かい合う

空は、まだ遠い 1

人はいつから背中に生えた羽根を畳んじまうんだろう。

幼稚園の頃に描いた「将来の夢」の絵には、月と星々が燦然と輝く宇宙に、宇宙服を着た未来の俺が笑顔でピースしてんだ。

そんなでつけえ夢が、いつしか「地元の公立高校進学」とかもう希望すらしてないものになっちまって、背負ってた羽根をいつの間にか自分でしまっちまってた。

んで、おっさんになつて、酒飲みながら振り返って溜息つくのか、ふつと小さく笑うか……。

良くも悪くもんな未来が待ってんだろうな。

目の前に置かれた白紙の進路調査用紙が、俺にそれを嫌というほど教えてくれている。

次俺が見るべき夢は「とにかく入れる大学」なんだろうかねえ……。

「おい、まだ悩んでんのかよ」

ニユツと背後からアゴが視界に現れた。

「んだよ、お前かよ」

「お前かよは無いだろ」

アゴマサが俺の態度に不服そうに腕を組むが、そりゃそうだ。綺麗な女の子に声をかけられるならまだしも、こんなアゴの出っ張ったむさ苦しい大男相手に、喜ぶ野郎がいたら見てみたい。

「どうせお前は大学進学決まってるんだから、ほっとけよ。俺の事なんか」

暑苦しい大男に手を振って帰るように促すが、そうはいかないらしい。

「いや、進路調査用紙集める係、俺なんだが……」

「じゃ、やるよ。ホレ」

言いにくそうにしているアゴマサに、俺の白紙の調査用紙を投げて席を立つ。

ひらひらと踊る紙に、本人も踊らされながら、なんとかアゴマサが紙をキャッチして「待て！」と叫ぶ頃には、もう俺は早足で教室から出ていた。

俺、目黒苦楽は、本当にどこにでもいる平凡な高校生だ。

マジで特筆すべきところが何もないくらい平凡だ。唯一やっていたサッカーだって、県内でもちよっと名前の知れてるところに入ったら、ベンチにすら座らせていただけなのであるうレベルだから、特筆するべきところでもない。

そして、平凡にボーっと過ごしてきたせいで、今どんな進路を進もうか、自分の未来さえ曖昧にしか描けなくなっちまってる馬鹿でもある。

帰り道の途中、今日の進路調査用紙のように真っ白な雲を見上げながら、一つため息を吐く。

「く・ら・く・くーん！」

そして、自分の未来について頭を働かせようとしたその瞬間。骨の軋むような音と共に、俺の体が背中から「く」の字に折れ曲がる。

「ふうおおー！」

そりゃ大の男が奇声を上げるだろ、全力タツクルをくらったんだからな。

「こんにちは苦楽くん！一緒に帰ろ！」

激痛に声が出ない俺の腰にしがみついで、背中に頼ずりをし続けるこの女は間違いなく紅だ。

俺は他にここまで過激なタツクルを見舞ってくるやつを知らない。

「アレ？ どうしたの？ 凄い辛そうだけど、腰でも痛めてるの？」

ゲホゲホと咳き込みながら腰を押さえるだけの俺に、紅は心底不思議そうに聞く。

お前のせいだ、ぶっ飛ばすぞ。という言葉は頭の中をめぐるだけで、口からは咳以外は何も出てくれようとしなない。

「まあいいや。一緒に帰ろうよお〜」

そんな俺の状況を知ってか知らずか、紅は俺の体をがっしり掴んだまま、懐かしの音に反応して踊る花の玩具のようにクネクネと左右に動く。

「断る」

腰の痛みも残るままだが、面倒臭いので紅の顔面を鷲掴みにして押し返すと「わぶぶぶ」と奇声をあげながら両手をバタバタさせている。

「なんでよ〜！ あたしと一緒に帰ると、楽しいよ？」

鷲掴みする手の向こう側から、まだ誘いがあるようだが、どうしたらここまできっぱり断るのにまだ誘おうという気になるのだろうか、理解に苦しむ。

「機嫌が悪いんだ、あと今ちょっと体調も」

断る口実のように聞こえるかもしれないが、今日は嘘ではない。あくまでも今日は。

さっきのタツクルのせいで腰に異常をきたしているのは間違いないし、今日の進路調査用紙の一件から、少し暗い気持ちになっているのも事実だ。だから、自分勝手ながらいつも底抜けに明るいこの女が少し鬱陶しく思えるのだろう。

「じゃあじゃあ、あたしが元気にしたげるから！ 一緒に帰る？」

相変わらず両手をバタバタさせたまま、超絶ポジティブ女が言う。

「……好きにしる」

そこからの反論が思いつかなかった俺は、時間の無駄だと思い、手を離す。

「おお、やったね！ じゃあじゃあ、クレープ屋さん寄る？ それともあたしが得意のシフォンケーキ作ったげよっか？」

俺の手から解放された途端、俺の真横まで小走りでやってきて、ありえないほどの笑顔で矢継ぎ早に質問をしてくる。

放課後になると八割方この女に絡まれるのだが、毎回俺の誘いを断る口実をテンションとしつこさで押し切ろうとするので、面倒くさいから俺が白旗をあげ、この女と帰宅することが多い。

毎回毎回、どこか寄り道を希望するのだが、従ったら恐ろしい目に遭ったことがあるので、もう二度とこの女の言い出した場所に行かないことを、心に固く誓っている。

「……あ」

そんな事を思いながら、紅の言葉をほぼ聞き流していたら、ふと思いついた。

「どうしたの？」

「いや、寄らなきゃなんねえところがある。じゃ」

突然立ち止まった俺に、不思議そうに首を傾げる紅を置き去りにして、普段なら曲がらない路地を折れる。

「え？ ちょ、待ってよ〜」

「買い物行っただけだ。ついてくんな」

「買い物？」

突然の進路変更にも、小走りについてくる紅をあしらうように言っただけで、逆に目を輝かせている。

「苦楽くんと買い物……。久しぶりだあ〜」

祈るように両手を合わせながら、目を細めて空を見る紅は、前から思っていたのだが、危険な宗教でもやってんじゃねえかと思う。

なによりまず、お前を誘ってねえ。というか、ここで別れるような言い方をしたつもりだったのだが、こいつのフィルターにかかる、「一緒に買い物行こうぜ！」と爽やかに親指を立てて言い放つ俺がいるのだろうか。チラツと覗く八重歯が光ったりとか、するのだろうか。

……それを想像できる自分が若干、この女に毒されてきているんじゃないかと不安になる。

とにかく、また断るだけ体力があるので、そのまま近所のスーパーに向かった。

親父は超転勤族の万年単身赴任。お袋は高校に上がるまでは熱心に家で家事をしてくれたが、俺の十六の誕生日が過ぎると、親父の所に行つて、そのまま帰つてこなくなつちまつた。

いい年こいて今でも名前に「ちゃん」付けて呼び合う夫婦なので、離れ離れなのが寂しかったのかなんだか知らないが、とにかく俺はほぼ一人暮らしを満喫している。

何も教えずに置手紙一つでお袋が去つていつてから、一ヶ月は地獄だったが、今では料理も覚え、スーパーで安いものを大量に買い込み、両親の仕送りの中から小遣いの量を多めに捻出できるまでの経済感覚すら身についた。

「ほえ〜。今日も戦争ですなあ〜」
そのため、狙った商品があるタイムサービスを見つけたら、参加しないはずが無いのだ。

近所のスーパー「イタチャ」は、普段閑散としているくせに、このタイムサービスの時間だけは、特設ワゴンの前に割烹着からパンチパーマまで個性豊かな、だが年齢層と性別はある一定の区域に集中した人ばかりができる。本日も例外ではない。

十代の俺でも毎回毎回戦利品を勝ち取れるか否か。それほどまでにこの戦場は厳しい。

息をふーつと吐いて、持っていた買い物カゴを紅に渡す。

「おお、出陣ですか、頑張つて！」

敬礼しながら紅が見守る中、俺は個性豊かな中年女性たちのあつて無いような隙間に体を入れる。

本日の獲物は冷凍鳥も肉二キロなんと五百円也。お一人様一パック限定と書いてあるが、紅が勝手についてきたお陰で二パック買える。あの女もたまには役に立つ。

罵声と怒号の鳴り響く中、体をもみくちゃにされながら少しずつ前に進むも、一向にワゴンとの距離は近くならないように思える。

そして、一パック、また一パックと減っていく今回の獲物。

焦りと不安が体の中を駆け巡る中、ようやく腕を伸ばせばワゴンに届くかと思われるくらいの位置まで俺の体が進んだ。

もうワゴンは底が見えており、それなのに人だかりは数を減らす事はない。なんなら、一度レジへいけばもう一度買っていいと考えて、二度目の挑戦を繰り返しているマダムすらいる。

だが、俺も大の男である以上はそんなヤワなプレッシャーには屈しない。腕をいっぱい伸ばして、狙いを定めた獲物を二パック一気に手中に収め、押すしか知らない人波を、縫うように逆走する。

「お疲れ様であります」

敬礼しながら待っていた紅を無視して、カゴを奪い返す。

それと同時に、最後の「一パック」が売れたのか、店内には拡声器で店員がタイムサービス終了のお知らせを喉を枯らしながら叫ぶ声が響いた。

あれだけ集まっていた人だかりも、蜘蛛の子を散らしたように散り散りになり、賑わっていた通路には、空になったワゴンと、タイムセールポップが寂しげに佇んでいた。

だが、今日に限って寂しげに佇んでいた奴が他にもいた。

つまらなさそうな顔をして、空になったワゴンを眺める少女が一人。

中年女性の群れがいなくなり、店員がワゴンからポップを外そうとしている横で、怒ってるのか悲しんでいるのかわからない表情のまま、彼女はそこを動かずにいた。

ふいに、彼女の視線が俺と鉢合った。

その瞬間、嫌悪感を隠しめせずに俺を睨みつけると、彼女はくりりと振り返って他のコーナーへ向かおうとした。

「ちよつと御免よ！」

その瞬間、軽快な声と共に、俺の手から買い物カゴが奪われた。

「お、おい。ちょ……」

俺が静止を口にする前に、紅は彼女にグングン近づき、肩を叩く。一瞬ビクンとして、目を見開いて口を間抜けに開けて振り返った彼女に、紅はいつもの笑顔を振りまいて言った。

「これ、あげるね」

冷凍鳥も肉ニキ口。紅は俺の苦勞の成果を、ポンと彼女の抱える買い物カゴの中に放り込んだのだ。

「へ？」

まさに目を点のようにしている彼女に、相変わらずしまりの無い顔で紅が笑いかける。

「じゃ、またね」

そう言っただけで軽く手を振ると、紅は俺の所へ小走りで戻ってきた。

「あいたっ！」

そして、頭頂部に俺の鉄拳制裁をくらった。

「な、なんで？」

「なんでもヘチマも無え。俺の努力の結晶を返せ」

頭をさすりながら、紅は涙目でこちらを見上げている。

「だって、あたしがいなかったらどっちみち一個しか買えなかったんだし、いいじゃん」

唇を尖らせながらそう反論する紅。ひどく真つ当な事を言われているので、反論の余地も無く、俺はため息を一つ吐いて紅からカゴを奪い返し、レジへ向かう為には踵を返した。

「……しないでよ」

直後、背中にぶつけられた小さな声に、俺たちは振り返る。

そこには、先程の少女が敵意剥き出しの表情でこちらを睨んでいた。

「バカにしないでよ！」

その小さな体のどこからそんな力が出るのか。腹の底から捻りだしたような怒号だった。

「あんたたち、それで『いいことしたなあ』とか思ってたんでしょ？」

私のこと弱者だつて見下して！ そんなちつぽけな同情、いらないんだから！」

矢継ぎ早にそう叫ぶと、少女は冷凍鳥もも肉二キログラムを俺に向かつて投げつけた。

しかし、それは俺と紅に届く事は無く、丁度中間くらいのところに力なく落ちた。

呆気に取られている俺たちを尻目に、彼女はフンと鼻を一つ鳴らして、陳列棚の間に消えていった。

俺たちは突然の事に言葉を失い、ただポカンと彼女の消えた棚の方向を見ていた。

やっぱり、いらんお節介などするもんじゃない。

そう紅に言おうとした時だった。

紅がスツと走り出して、落ちた冷凍鳥もも肉を拾い上げて、彼女が消えた後を追いかけた。

「お、おい。紅！」

普段はおっとりとしているくせに、悲しんでいる人間とかを見るとスイッチが入る紅は、このままさらにいらんお節介をかけて、話を厄介にしかねない。というか絶対する。

そう確信している俺は、周りに被害が及ばないように紅の後を追った。

「どういうつもりよ」

陳列棚の間で、紅とその少女は対峙していた。

少女は胸いつぱいの敵意で紅を睨み付けている。一方の紅は、背中をこちらに向けているので表情を窺い知ることはできない。

「あたしがあげたいからあなたにあげるの。だから、コレ、あげる」
そういつて、紅は少女の買い物カゴの中に冷凍鳥もも肉を入れる。

「だから、余計なお世話だつて言つてんのよ」

すぐさま少女はそれをカゴから出して紅に押し返す。

「いいじゃん。あたしがそうしたいの」

押し返されたそれを、紅がまた少女へ押し返す。

「なによあんだ。そんなに私みたいなのをバカにして面白いの？」
「バカにしてないよ。それがあなたじゃなくても、悲しそうにしてたら、あたしはこうするよ？」

「そういう態度がバカにしてるって言うてんのよー！」
言葉を一言吐くごとに、お互いでもも肉を押し合っている。

傍から見るとシユールな光景だが、どうにも相手の少女は顔から不快感以外何も感じ取れないほどになっている。

……まあ、俺が止めるしかねえだろ。

「いたいっ！」

と、思ったので、とりあえず紅に後ろから鉄拳を見舞っておいた。
「何するの〜苦楽くん」

涙目で後頭部をさすりながら振り返る紅を無視して、鳥もも肉をその手から奪う。

「悪いな。こいつはこういうやつで、いらんお節介をしちまうんだ。
もしそれでお前が傷ついたなら謝る。この通りだ」

そう言うって、目の前でポカンとしている少女に頭を下げた。

「……わ、分かればいいのよ」

少しの間があいてから、少女からお許しが出た。顔を上げて見てみると、彼女は腕組みをしながら鼻をフンと鳴らしていた。

横で紅が少し言いくそうにモジモジしていたが、こいつはきつとまだこの少女に特売品を分けてやりたいのだろう。

「だから、お詫びのしるしにこれを受け取ってくれ。ホレ」

そう言うって、俺は冷凍鳥もも肉ニキログラムを少女の持っているカゴの中に放り込んで、すばやく踵を返して歩き始めた。

「おい、紅。行くぞ」

その言葉に顔をぱあつと明るくさせて「うん！」と頷いてから小走りで紅が俺の横についてきた。

「ちよ、ちよつと！ 待ちなさいよー！」

後ろからそんな声が聞こえてきたが、背中で弾き返す。逃げるが勝ちだ。

「さすが苦楽くん。やりますなあ〜」

レジを通し終えて、荷物を抱えながらイタチヤを出る。

横にいる紅は鼻歌も交えながら、心底上機嫌だ。

「それにしてもあの娘、可愛かったね」

ニコニコしながら紅が言うのも頷ける。性格はキツそうに見えるが、サラリと流れるようなよく手入れされたブロンドの長い髪に、クリツとした大きな目、モデルかと思える程小さな顔と唇は、あそこまで敵意剥き出しの表情をしていなければ、軽く見とれていたんじゃないかと思える程、綺麗だった。

「……でも、やっぱりちよっと、可哀想だったね」

そう言うのと、紅は俯く。

俺は、何も言わずにただ紅の少し前を歩いた。

だってそうだろう。誰だって少しくらい悲しい気持ちになるさ。

あんな少女があんな場面であんなところで放心してたら。

だから俺は、紅の呼びかけに答える言葉を出せなかった。

「でもさ、そう思っても、あの娘のためにならないんだよね」

上を向く紅の、あの少女とは対照的な短いくせつ毛が、ふわりと揺れた。

「ちよっぴり傷つけちゃったのは、反省だね。苦楽くん」

少し寂しそうな笑顔でこちらを見るので、思わず「ああ」とだけ返す。

袋の中の冷凍鳥もも肉ニキログラムが、音を出して揺れる度に、あの少女の事を思い出していた。

悲しげな表情、怒った表情、驚いた表情。ころころ変わるそれらは、普通の少女となんら変わらないのに、彼女が乗り、動かしている車椅子が、印象を大きく変えてしまっていた。

そんな事を考えては、ワシワシと頭を掻く。

白紙の進路用紙といい、彼女の悲しそうな表情といい、そんなこ

とばっかり思い出しちまうと、どうにも気分がよくない。

そう思つて、今夜の夕食の献立を考えようにも、頭は正常に回ってくれない。

「ドーン！」

その声と共に、突然背中を押された。

「おうわお！」

そりゃ大の男が奇声をあげるつてもんだ。柵が無かったら歩道橋から完全に落下してるレベルだからな。

「何すんだよ！」

さすがの俺も振り返つて少し怒った顔を見ると、相変わらず紅の間抜けな笑い顔がそこにはあった。

「そうそう。そんな風にしてるのが苦楽くんだよ」

そう言つて頷くと、早足で歩道橋の階段を下る。

「じゃ、バイバイ。また明日、ここでね」

いつも通り小走りで駆け出す紅を、歩道橋の上から見下ろす。

街はいつの間にか真っ赤な夕日に燃やされているように赤々と染まり、足元では帰路を急ぐ人々が渋滞を作っていた。

変わらねえ風景に、変わらねえ毎日。

いつも通りの日々にも通りの俺。

何も変わらないということも、いいことなのかもしれないけど。

どことなく物足りなさど、焦りを感じる時がある。

このままじゃ、俺は をしました！ と誇るものが何一つ無いまま、大人になつちまう気がして。

でも、その を埋める何かは見つからなくて。

そんな事を考えていると携帯が鳴ったので、ズボンのポケットを漁る。

メールは紅からなので、後で見っておこうと思ひ携帯をしまつと、ポケットから紙切れが一枚落ちてきた。

「アゴマサくんを困らせたらダメだよ。 byあなたの紅ちゃんよ
り」

「ご丁寧に紅の簡単な似顔絵付きで、そんなことが書いてある進路調査用紙だった。」

「しつげえなあ。と思いながらも、捨てちまってもどうせアゴマサがまた印刷してくるだけだと思い、乱暴に制服の胸ポケットにしまいなおした。」

空は、まだ遠い 2

「で、書いてきたのか？」

むさ苦しい体つきに、長く伸びた顎。

白紙の進路調査用紙を投げつけてから一夜明けた今日も、アゴマサはいつも通りだった。

「知らねえ」

なので、俺の返事もいつも通りだ。

「……全く。春日部ちゃんにどう説明すればいいんだ」

「自分で説明しろ」

顎に指を当てながら悩むアゴマサに、俺はいつも通り言い放って携帯ゲーム機を鞆から取り出す。

画面の中では、大型ロボットに乗った少年少女が宇宙をところ狭しと駆け巡り、戦いと冒険の日々を繰り返している。

「ほい、没収」

しかし、銀河の冒険は、開始十秒で幕を閉じた。

「何すんだよ！」

少しイラつとして振り返ると、そこには長いポニーテールを揺らした、メガネの小柄な女の子がいた。

ちなみに、没収といいながら高くあげたつもり腕も、椅子に座ったままゲーム機を取り返せる程度の高さしかない。

「……まあいいや」

そりゃあ俺も抵抗しないわけである。天下の春日部ちゃんが目の前にいるんだからな。

「えー！ まあいいやって何よう……。私だって目黒君が不良にならないように一生懸命考えてやってるのに」

口を尖らせながら、両手をブンブン振り回すその姿は、ガキそのものだ。なので俺は毎回敢えて何も言わない。それに、実力行使すれば、携帯ゲーム機ごとき二秒で取り返せるから、何も困ってやし

ない。

「まあまあ、そんな奴放っておいて、俺とお話でも、どうですか？」
アゴマサが妖艶に顎を光らせながら、俺たちの間に入ってきた。

「アゴマサ君は、進路のプリント集めてくれた？」

「……」

アゴマサの顎を光らせたままリリースするという無言の返答に、
春日部ちゃんは肩を落とした。

「やっぱり、あたしの言う事は誰も聞いてくれないのね……」

「い、いや。そんなことないです。春日部ちゃんは魅力的だし」

「春日部ちゃんって言うなー！」

アゴマサがフォローしようとしてついポロリと春日部ちゃんと口
に出しやがった。

春日部ちゃんは、そう呼ばれるのを嫌う。なぜなら……。

「先生に向かつて、そういう口の利き方はいけません！」

こう見えてもうちの担任だからだ。

ちなみに、我がクラスのどの女子生徒よりも背が低い。紅と並ぶ
と、ほぼ親子だ。

「す、すみません。先生」

そして、そんな春日部ちゃんに無謀にも想いを寄せるアゴマサは、
今日も彼女のいいなりになってプリントを集めたり配ったりしてい
る。

まあ、全部自分から進んでやっているのでもいいのだが。

何しろアゴマサはDMなのだ。二年生にして各大学からスカウト
が来るほどの実力を持つ柔道も、投げられる快感に駆られ、より強
い奴に、より美しく投げられたい。より逃れられないように固めら
れたいと思い、毎日毎日猛者たちと組み手をしていたら、いつの間
にか自分よりも強い者がいなくなつた変態だ。

中学校の頃は何度倒しても立ち向かってくる「不死身のマサ」と
して有名だったらしい。

とにかく、事実目の前で春日部ちゃんの説教に多少鼻息を荒げ

ているアゴマサの姿であつて、それ以上の証拠は知りたくも見たくもない。

「じゃあ、目黒君。ちゃんと今日の終わりまでに調査用紙書いておいてね」

頬を膨らましながら春日部ちゃんがそう言うが、俺はひらひらと手を振って返事の代わりとすると「もう！」と可愛らしく地団太を踏んでから教卓へ向かった。

始業のチャイムも鳴り、ざわめいていた教室も静かになり、いつもと変わらないホームルームが始まり、いつものような日常が幕を開ける。

いや、もう目が覚めた瞬間から、いつも通りの当たり前のサイクルの中に放り込まれてんのかも知れない。

そう思いながら、鬱陶しいくらいに晴れた空を眺めても、気分は何一つ晴れなかった。

結局、今日もノートと調査用紙は白紙のまま、授業はダラダラと過ぎていった。

またしてもアゴマサの野郎に捕まりそうになったので、今日も走って逃げた。

「く・ら・く・くーん！」

が、逃げている途中に、嫌な声がしたと思っただが最後。

「グベア！」

俺はまた体を「く」の字に思いつきりひん曲げられて、今日は地面をのた打ち回った。

「おお！ アグレッシブな踊りだね！ 何それ何それ?!」

横で楽しそうに俺を見る紅を、一度同じ目に遭わせてやるうかとも思うのだが、如何せん今は俺の体がのた打ち回る以外の行為を許してくれない。

「踊るのも楽しいけどさ。今日も一緒に帰ろ？」

笑顔でそう話しかけられても、俺はやっと四つんばいになることが許された程度の体の状況で、声など出るはずも無く、必死で首を横に振った。

「よし、じゃあ一緒に帰ろ〜！」

目と言つ名の節穴を身に付けたあの悪魔は、俺の襟を掴んでずると引きずって校舎を出た。

「ごめんってば苦楽くん」

痛めた腰を擦りながら、無言で俺は帰り道を進む。

「もうしないから〜」

その周りをハエのようにくると回りながら纏わりつく紅。

引きずられたまま階段を降りるとき聞いた、何か乾いた物が砕けるような体内音と、校庭の砂によって磨き上げられ、テカテカと輝く制服を忘れるまで、俺の怒りは静まらない……多分。

そのため、今日の俺も少しいつもの帰り道とは違う路地を折れた。そう、昨日と同じあのスーパー『イタチヤ』へ行かねばならないからだ。

「う……まさか、苦楽くん。怒ってる？」

ここまで冷たくしてもまだついてくるこの女を放っておいて、ジヤガイモ、人参、玉葱、牛肉を買うべくして、本日のチラシを靴から取り出して確認する。

「……相当怒ってるね。ごめんね」

各野菜に丸をつけながら値段を確認している俺を見て、さすがの紅もやっと悪い事をした気分になったのか、しおらしくなっていた。無論、俺の怒りが収まるわけも無い。

いくら無視してもあいも変わらずついてくる紅は放っておいて、今日も激戦のスーパーに足を踏み入れる。

前日と同じくギラギラとした熱気に包まれた店内は、恒例のあの行事の時間が差し迫っている事を如実に語っていた。

但し、今日の俺にそんな物はどうでもいい。たまごMサイズが一パック58円だからといって、今の俺には全く関係の無いもの。というか、あんなもんをいつもの勢いで奪い合ったら割れる、確実にただただ、機械のような正確さでもって、狙った獲物をカゴの中に放り込んでいく。

ワゴンの方では、ついにタイムサービスが始まったのか、また怒号と悲鳴の入り混じった声と、店員が喉を枯らしながら拡声器で叫ぶ声が聞こえる。

だが、目当ての品を全て入れ、後は家に帰り包丁を振りかざすだけの俺は、振り返りもせず、レジへと向かうべく足を進めた。

その時だった。

カシャという乾いた音と共に、俺の買い物カゴの中に何かが入れられた。

「それ、あげます」

振り返ると、長い黒髪をまっすぐ伸ばした、まさに大和撫子という言葉がふさわしい女性が、俺に向かって微笑みかけていた。

そして、俺のカゴの中には本日のサービス品。たまごMサイズが一パック。

「……何ですか？」

見知らぬ美人と、カゴに入れられたサービス品。全くわけがわからずに、思わず口に出してしまった。

「何って？ たまごですよ？」

小首を傾げてくる姿は可愛らしいと思うのだが、違う。

「そうじゃなくて……」

「ああ、お金はきちんと払ってくださいね。でもサービス品なんて58円なんでお得ですよ」

俺が言い終わる前に、人差し指を立てながら美人さんは説明してくれる。

「いや、そうでもなくて……」

「あ、そんな。お礼なんていいんですよ？ ちょっとした善意です

から」

またしても言葉を遮られたが、先読みしている雰囲気を出しながら、この女、何一つ俺が言おうとしている事を先読みできていない。「あの……」

「そんな私は名乗るほどの者でもありませんので、失礼します」
そう言っただけで流暢かつしなやかにお辞儀をすると、その女は踵を返そうとする。

「いや、待てよ」

さすがの俺も、それを阻止すべく肩を掴んでしまっレベルだった。「はあ、なんででしょうか？」

何も心当たりも無く呼び止められたと言わんばかりの顔で、こちらを振り返る。

「お前、誰だよ」

「山吹ひかるですが」

名乗るほどの者でも無いはずが、あっさりと名乗りやがったのは最早どうでもいい。

「なんで、こんなことしたんだ？」

カゴに入れられたたまごを指差しながら、俺ははつきりとした口調で、子供に問いかけるように質問する。

「……ご迷惑、でしたか？」

その女は急に申し訳なさそうな顔をして、上目遣いでこちらを窺うように聞いてきた。

「い、いや。有難えけどさ……」

綺麗な女の子にそんな事をされたら、さすがにそういった返答をするしかない。

「本当ですか？ 良かった」

その答えを聞くや否やぱあっと一気に表情が明るくなった。やはり結構な美人だ。

「では、私はこれで……」

「待てよ」

迂闊にも少し見とれている間に、またしても何事も無かったかのように去ろうとする女の肩を、再度俺の左手が捉えた。

「まだ何か？」

まだ何か聞くことがあるのか、純粹に疑問に思っている。そんな感じが表情からありありと窺える。これほどまでに口以外で語るのがうまい女性も珍しい。

「いや、だから、なんでこういったことをしてくれたの？」

またしてもたまごを指差しながら、俺は丁寧に尋ねる。今度は、これが迷惑では無いことを前面に押し出しながらの質問で、前回と同じ問答になる事を避けた。

……ここまでしなければ、平気で同じ事を聞いてきそうだから困る。

「ああ、お返しです」

「お返し？」

「そう。あなたに同じ事をしていただいたので、お返し」

ふわりと笑いながら言うその顔はステキだが、この山吹さんとやらと俺との接点は、思い出している以上では何一つ無い。

というか、紅よりも高い身長で、ここまでの和服が似合いそうな雰囲気満点で天然丸出しの美人。どこをとっても個性的なこの女、一度何かで絡んだら忘れそうにもないだろう。

「覚えてらっしゃらないのですか？ 昨日の事なのに……」

少訝しげな表情になった山吹さんは、妙な事を言い出した。

昨日、タイムサービス。そう考えると、思い出すのは車椅子の少女しか浮かばない。

「昨日の冷凍もも肉の？」

「そうです。藍ちゃんのお世話係なんです。私」

お世話係、という言葉が少し引っかかったが、やっとここで話が繋がった。ここまでえらく長い問答をさせられてきたためか、いつの間にか紅に引きずられた怒りを徒労感が上回っていた。

「では、私はこれで失礼しますね」

ぺこりと深くお辞儀をして、山吹さんとやはらレジの方へと向かっていった。

「……帰る」

徒労感と倦怠感を両肩に乗せた俺は、思わず口からそんな言葉が漏れていた。

「そうだね、帰ろっか」

完全に会話に参加してこなかった紅が、ひよこつと俺の背中から顔を出して答える。

「あいたっ！」

なんとなくムカついたので、一発だけ鉄拳を見舞っておいた。

毎日やってくるストーキングバイオレンス女、紅。

昨日出会った毒舌少女。

本日出会ってしまった超天然美女、山吹さん。

俺には女難の相が出ていることだけは間違いない。

「おい苦楽。おかわりはまだか」

なぜなら、無事紅を追い払い、料理に専念できたエプロン姿の俺の後ろで、空になった皿をスプーンでカンカン叩いているのは、幼馴染の赤井涼子あかぎりょうこだからである。

「そんなくらいでめえで盛れ」

「できるわけないだろう」

俺の返答に「何言ってるんだ？」と言いたげなほどキョトンとした表情で涼子は告げる。

「私の家事センスの無さ。忘れたか？」

自信に満ち溢れた表情で言う言葉が、ちっとも偉くないのが、彼女の凄いところでもある。

ちなみに、この女の家事センスの無さは忘れようとして忘れられないものがあるため、さすがの俺でもその伝説の数々は覚えている。

「だから、ホレ」

そう言うと、空いた皿を俺に向かって突き出す。椅子の上で胡坐をかきながら、スプーンを咥えて笑うその姿は、完全に着ている名門女子高の制服を泣かせている。

ため息を吐きながら皿を受け取ると、たっぷりとカレーを盛ってやる。

「そうそう、それでいいんだ。未来の嫁よ」

女子高生の皮を被ったおっさんがニシシと笑いながらカレー皿を受け取る。

「嫁になれるわけねえだろ」

呆れながら自分もカレーを盛り、涼子の対面に腰をかけた。

「なれるさ。カレーを作るのがここまで上手いのは、私の学校の女モドキ共の中には、まずいないだろうからね」

ふふんと自慢するように言って、涼子はカレーを口に運ぶ。

「淑女が淑女たる為に云々とか朝礼で言わされる学校なのか？」

それを聞いて、涼子はケラケラと笑いながらスプーンを置いた。「そんな言わされている言葉に意味は無いよ。淑女が淑女たる為にあの学校に行っているのだったら、合コンの話題や性の話題が飛び交っているあの教室は何なのか教えて欲しいくらいだ」

青いフレームの眼鏡をクイツと持ち上げると、涼子は立ち上がって続ける。

「世の中、自分が知らない世界に憧れ、期待しすぎない方がいい。あとからショックを受け、傷を作るのは自分なのだからね」

それなりに筋の通った話のはずが、涼子の口元についているカレーのせいで、あまり説得力が無いのが素晴らしい。

「しかし少年。君は相変わらず女っ気が無いね」

言いたい事を言って座ると、コロっと話題が変わる。まあ、いつもの事だ。

「お前のような妙なのがまとわりついてるからだろ」

「ははは。災難だね。ついでに学校では丸井紅がいるようだしね」
災難の元が高笑いしているが、これ以上何か言っても無駄だと判

断し、目の前のカレーを貪る事にした。

「……少年。今日は何に腹をたてたんだい？」

「はあ？」

黙々とカレーを食べている中での突拍子も無い話題に、少し呆れながらも涼子の方を見る。

「君は今日、イライラしていたんだろう？」

優しく笑いかける涼子の顔は、先程のニヤニヤしたそれとは大違いで、少したじろいでしまう。

「でもまあ、それも青春の通過点の一つだ。頑張れよ、少年」

そう言つと、いつの間にか食べきつたカレーの皿を流しに運び、そのままキッチンの窓から消えて行った。

……頼むから、普通に帰って欲しい。

俺の女難はこの女。赤井涼子と出会った幼少期からすでに始まっていたのだと思う。

というか、俺の事を『少年』と抜かすが、あいつも同い年じゃねえかよ。

……ただ、どことなく『少年』とあいつに言われてもナチュラルに会話が進んでいくのが悔しいが。

そんな事を思いながら皿を洗い、ふと窓の外に目をやると、いつの間にか夕方と夜がせめぎあっているような空が、赤から藍色、そして濃紺への綺麗なグラデーションを作っていた。

毎日変わらない空の移り変わりの筈が、どこか心が締め付けられるような切なさ、儂い美しさを持っている気がする。

そう感じるのも、俺がいつの間にか空を見なくなつて、足元や、自分の目の前しか見なくなつたからかもしれない。

机の上に無造作に置かれた白紙の進路調査用紙が、風に揺れてカサカサと揺れた。

空は、まだ遠い 3

「いい加減にしてくれよ……。俺の立場にもなっしてくれよ」

アゴマサが半ば懇願するように俺の机に纏わりついていても、白紙のものには書かなければ文字は出ないし、俺が自分で考えて書かなければ、その文字に何の意味も無い。

だから、無言を回答としてゲームをやり続けるしか無いわけで。

「ほーい。じゃあこれは没収」

そんな面倒臭い話を聞きながら気なしでゲームをやっていたら、周りに集中できていないはずも無く。

「まったく、今回で何回目なんだか。職員室まであとで取りに来てよね」

もつうんざりしたような春日部ちゃんのため息と共に、始業のチャイムは鳴り響いた。

「あ、そうそう」

教壇へ向かおうとして振り返る春日部ちゃんは、少し真剣な表情で振り返った。

「その時、少し話すからね」

それだけ言うと、またいつも通りに戻り、何百回と聞いた朝の挨拶、出席確認が始まる。

そして、欠伸が出るような授業と、特に熱の入らない日常が、また俺を待っている。

なんだか日々を無駄遣いしているようで勿体無いと思う気もするが、それを打開する何も思い浮かばない俺は、その日常の中に緩やかに流されながら生きていく選択肢を今日も取る。

「先生は心配だよ、目黒くん」

放課後、ゲームを返してもらいに美術準備室にいる春日部ちゃん

を尋ねると、早速ブスつとした顔の春日部ちゃんが待っていた。

「若者は夢を持ってナンボだよ、なのに目黒くんと来たら進路用紙も白紙だし、なんだかいつもボーっとしてる感じだし、何か悩みでもあるの?」

「無いです」

少し怒りながらも、心配そうに聞いてくる春日部ちゃんには悪いが、面倒くさいので早めに切り上げたい。というのが俺の今の正直な気持ちだ。

「それとも、夢が恥ずかしくて言にくい? アイドルになる? だとかさ? でも、そんなの全然恥ずかしいことじゃないよ。だって私だって……」

「違います」

「そ、そっか。じゃあ今から先生と一緒に何になりたいか考えてみる?」

「遠慮します」

少し、イライラしていた。別に何も悪い事はしていない。授業を妨害することも、フケることも無くやってきて、進路調査用紙だって、適当に書いているやつを尻目に、悩んでいるからこそ白紙のままなのだ。なんでそんな中で俺だけこんな風に話をしなければならぬのかわからず、ムスつとした態度で答えた。

「そっかぁ……」

それだけ言うと、春日部ちゃんは下を向いて黙り込んだ。

「じゃあ、失礼します」

「待って!」

俺が踵を返そうとしたその時、春日部ちゃんは継る様に声を張った。

「何かあったら先生に言ってね。頼りないかもしれないけどさ」

「……わかりました」

それだけ言っただけ帰ろうとすると、俺の背中にまた声が飛んできた。「今からなら、頑張れば何にでもなれるよ。宇宙飛行士にだって、」

なれるんだから」

聞かない振りをして、美術準備室を出た。

青と赤が半々くらいの空は、また歩道橋の下を走る忙しい車や人の群れを見下ろす。

俺はただただ歩道橋の欄干に手をかけ、ボケーっとどこを眺めるでも無く佇んでいた。

珍しく紅のいない放課後は、イヤって程静かで、どうでもいい雑音が耳に飛び込んでくる。

愚痴に陰口、自分や他人を卑下する言葉……。

どれもこれもイマイチ暗い話題の筈が、なぜかそれを口にしながら歩く奴らはゲラゲラと下品に笑う。

アホみたいにうるさい女がいないせいと、あまり浮いた気持ちにならない事が重なり、今の自分を諦めた奴らが現状に満足したフリをしてる笑い声が、やたらと頭に来て、頭をボリボリと掻いてから歩道橋をおりようと踵を返した。

「あら、あなたは……」

そこでなぜか、俺はまたしても出会ってしまった。

「……山吹、さん？」

「あ、覚えていてくださっただけですね。嬉しいですわ」

一度会ったら忘れるほうが困難な天然美女は、今日は制服姿だった。

ただし、その姿が俺には非常にショックだったのは間違いない。

「そ、その制服って……」

「はい。春木女子高等学校に通っています」

にこやかにそう言う山吹さんと、制服の真ん中で揺れる黄色いリボン。

「……まさかさ、その生徒会長さんって」

「あら、ご存知なんですか？ 赤井さんの事？」

赤井涼子。あのオヤジ女子高生のせいで、無駄な繋がりができず
しまった。

「なんだか汗をかかれていますようですが、ハンカチ、使いますか？」
止め処なく流れる冷や汗を押さえるため、無言でハンカチを受け
取り、顔中を全てを忘れるほどの勢いで拭きたくる。しかし、ハン
カチが重くなる以外の効果は一切無く、冷や汗はまだ止まってくれ
そうになかった。

なぜなら、赤井涼子は悪魔だからだ。

俺の周りにいる女性には、必ず俺の過去の恥ずかしい話ベスト1
0を発表するという最低の習性がある。

また、俺が少しでも好意を寄せた女性がいるとみると、その女の
粗という粗を根掘り葉掘り探してきて、俺が半泣きになるまで事実
を発表し続ける。そして、降参をすると「相変わらず女を見る目が
ないな、少年」と高笑いをするのだ。

しかも、その情報の100%が真実というのが俺にとっては悲し
すぎる。

そんな悪魔の女のそばにいる天然系美女山吹さんと、俺が少しで
も知り合いだと言った瞬間、またあの面白い玩具を見つけたといわ
んばかりの悪魔の笑みを目の当たりにすることになる。

そうしたら、春木女子高校での俺の評価はナイアガラなど目じゃ
ないほどに急降下するに違いない。

つまり、この汗まみれのハンカチも、洗濯したとしても返せない
可能性が高いということだ。

「はは、あ、ありがと。じゃ、俺はこれで……」

引きつった笑顔で、手を振りながら逃げるように歩道橋を下りよ
うとした時だった。

「あ、ダメです」

不意に、山吹さんの手が俺の腕を掴んだ。

思った以上に強い握力だが、すべすべとした女性らしい柔らかな
手に戸惑いながら振り返りと、真剣な表情で彼女は首を横に振った。

「今、あなたが行くと、藍ちゃんが飛べなくなります」

俺の瞳をまっすぐに見据えながら言ったその言葉は、深く胸に突き刺さる……ようなことは一切無く。

「……は？」

という言葉を十秒ほど経ってから振り絞るのがやっとだった。

「あの子を、飛ばせてあげたいんです」

相変わらずよくわからない電波を受信していらっしやるようで、取り合えず俺の進行方向にあの車椅子の少女がいるのかと思って視線をやると、確かにそこにいた。

車椅子を歩道橋の下に置いたまま、上半身の力だけで、這うように歩道橋の階段を上るジャージ姿の彼女がいた。

その額は遠くからでもわかるほど汗に塗れ、肩で息をしているの
がありありと伝わってくる。

しかし、なんでまたこんなところで？

真剣な表情で少女を見守る山吹さん、そして意味のわからない「
飛ぶ」発言。

……まさか。これから、歩道橋の上から「飛ぶ」のか？

「それはダメだろ！」

思わず力いっぱい山吹さんの手を振りほどき、少女の下に駆け寄ろうとした。

だってそうだろう。いくら足が不自由だろうと、突然自殺なんて、
あまりにも悲しいじゃねえか。

そう思っ駆け出そうとした瞬間。俺の視線がいつの間にか空を
仰いでいた。

一瞬の後、背中にかかる大きな衝撃と、止まる息。クラクラする
頭。

そして気づく。俺は、地面に叩きつけられた、と。

「邪魔させません」

視界に入ってきたのは、怒気と使命感を孕んだ表情で、俺の腕を
取っている山吹さんだった。

彼女の手に手首と腕をがっちり固められていて、立ち上がるうにも立ち上がれなくなっている。足腰に力を入れりゃあなんとかなるんじゃないかと思っても、そううまくいかない。

「でもよ、いいのかよ！ あの子、飛んじまうんだろ？」

「ええ。だから、そつと見てあげてください」

全くもって意味のわからない事を言いながら、山吹さんは俺の腕を絡めて離さない。

「お前、友達が死ぬ手伝いすんのかよ？」

「はい？」

一瞬ビツクリした顔で山吹さんが聞き返す。その瞬間に、俺の腕の拘束が少し緩まった。

その隙を逃さず、俺は腕を振りほどいて立ち上がると、一気に地面を蹴る。後ろから山吹さんが何かを言っているが、耳を傾け隙を見せれば、俺はまた捕まり、組み伏せられるだろう。

「デメエ！」

そう叫びながら階段に差し掛かると、もう中盤まで来ていた少女が、息を絶え絶えにしながらかちらを見上げ、目を丸くした。

「何諦めようとしてんだよ！」

言いながら、俺は少女の体を抱きかかえた。

「ちよつ！ な、何すんのよ！」

突然の出来事に目を白黒させながら抗議をするが、がっちり抱きかかえているため抵抗もほとんどできないまま、一気に階段の下まで運ばれていった。

「あんだ、何のつもりよ！」

車椅子の上に降ろしたら、ブンブンと両手を振って、また抗議を始めた。

「何つて、放つとけねえだろ！」

「ハア？ 言ったわよね。私、そういう同情が一番嫌いだって。またお節介でも焼く気？ いい加減に……」

彼女の言葉は、弾けるような乾いた音にかき消された。

生まれて初めて、俺は女に手をあげた。

「……甘えてんじゃねえぞ」

頬を押さえながら、ポカンとした顔でフリーズしている少女に、俺はもう感情を抑え切れなかった。

「何様のつもりだテメエはよ。足が動かねえくらいで何だよ。んなもんで命を投げ捨てんのか？」 『私は不幸です。みんな同情してください』 って言ってるようなもんじゃねえかよ」

一度堰を切った感情は、どうにも収まってくれない。口からは意図と関係なく、思ったままが垂れ流されていった。

「自分がそんな境遇だからって、斜に構えて世間を見て、誰の手も借りないで偉いねって言われて、結局そのプレッシャーに押しつぶされて死んじゃいました。なんて下らねえ理由で死ぬのは止めやがれ！ どんな環境だろうが、どれだけ醜い人間だろうが、どんなけ人に迷惑かけようが、生きてなきや何も意味が無えんだよ！」

後半は、くだららと惰性で生きている自分に言い聞かせていたのかも知れない。だが、それ以上に自分で命を投げ出そうとする目の前の少女が、俺にはどうしても許せなかった。

「だから、テメエは生きる！ こんなところから飛ぼうなんて考えるんじゃねえよ……」

最後は、息があがって半ば言葉にならなかった。

「だから、そういう『飛ぶ』じゃないんですよ」

後ろから、山吹さんの声が聞こえ、振り返る。

先程とは打って変わっていつも通りの穏やかな笑顔を浮かべた彼女の顔がそこにはあった。

「藍ちゃんはですね……」

「ひかる！」

山吹さんの言葉を遮って、少女は叫んだ。

それを見て、山吹さんにはっこりと笑った。

「……どういことだよ？」

ただ一人、今のやり取りの内容を一切理解できていない俺は、置

いていかれている苛立たしさと、間違つて熱い講釈を垂れてしまつたかもしれない気恥ずかしさが混じつて、少し不機嫌に聞いた。

「どういうことでもないわ。あなたには関係無いから」

腕を組んだままピシヤリと言い返す少女に、後ろでニコニコと笑っている山吹さん。

「意味わかんねえよ」

やり場の無い怒りと恥ずかしさに、頭をワシワシと掻く。

「わかんなくていいのよ。あなたに分かつて欲しくなんてないわ」

そう言つと、少女はフンと鼻をならしてそっぽを向いた。

「……んだよ、それ」

勘違いかもしれないとは言え、少女のためにやったことのはずが、当の本人からこの言われようではさすがの俺もばつが悪くなり、車椅子の横をすり抜けて歩き出した。

山吹さんが俺を止めようと何か言っていたようだが、振り返らずに歩くことにした。

藍というあの車椅子の少女。彼女の頬を叩いた右手を空に向けて開いてみても、焼けるような赤色が手の周りを包むだけで、ジンジンと心の奥底で疼く様な痛みや、掌に残る感触は、全く消えてはくれなかった。

空は、まだ遠い 4

「悩んでいるね、少年」

今日は赤いフレームの眼鏡をかけて、赤井涼子はやってきた。

「頼むから普通に玄関から入ってきてくれ」

「その悩みが、その包丁捌きからありありと出ている。若い、若すぎるッ！」

俺の言葉を見殺して、窓枠に足をかけながら感慨深そうに拳を握っているこの女に、最早何を言っても無駄だろう。

「して少年。今日も何を悩んでいるんだい？」

「よっ」と言いながら窓枠を乗り越えようと、山芋を短冊切りしている俺の横に立ち、顔をずいっと寄せて聞いてくる。

「もしかして、色恋に興味でも湧いたかな？」

トントンと鳴るまな板の音を返事としても、全く動じることなくこの女は質問を続ける。

「もしかして、いい女と出会った……。なーんてことがあったのかな？」

俺の右側から左側に移動し、ニヤニヤと笑いながら質問を続ける。そして、その質問の幅が狭まってきたことにより、俺は気づいた。この女、山吹さんらとの出会いを、もう認知している可能性がある。

「そして、今日も一悶着あったとか？」

耳元でそう囁かれ、全くもって違う意味で背筋がゾクッとした。気づいてやがる。これは確実に気づいていやがる。

頭の中でそんな言葉が何度もリフレインし、俺の額からツーンと汗が一滴流れた。

立て付けの悪いドアのような音を鳴らしながら、ゆっくりと首を回してみると、そこには、この十数年の人生の中で幾度か目にした、悪魔の笑顔があった。

「少年。お姉さんから逃げようなど、百万年早いぞ」

語尾にハートマークが付きそうなほど甘ったるい声で言うその言葉は、地獄の釜の蓋を開ける言葉だとは誰も思わないだろう。

当の本人である俺も、そんなことは思いたくは無い。

なので、その事実から逃げるためにも、何事も無かったかのように山芋を器に盛り込み、食卓に並べる。

「……ダンマリかい？ 少年」

やれやれといった感じで肩を竦め、いつものように俺の向かいに腰を下ろすと、懐からマイ箸を取り出して、早速本日の夕食、ざる蕎麦に手をかけた。

「うむ、オクラに山芋、納豆か。いいチョイスだ、少年」

うんうんと頷くと、涼子は制服の袖で口を拭った。

「……まるで、口まで滑ってしまいそうだね」

そう言つと、ニヤリと笑いながらこちらに視線を送ってくる。

俺は絶対にそんな圧力に屈しないと心に誓い、何事も無かったかのようにエプロンを脱ぎながら手を合わせた。

それに、何より今日は、悪戯に乗る気分にはなれないのだ。あの車椅子の少女が、俺に手をあげられた時に見せた顔が頭にちらついで、どうにも気分が曇る。

「ハア……分かったよ少年。今日は君の事をいじめるのはこのくらいにしておこう」

少々の沈黙の後、そんな空気を読み取ったのか、ため息混じりに涼子が言った。

「そんな暗い顔をしないでくれ。君の顔がそんなにどんよりしていたら、折角の食事が不味くなる」

笑いながらも眉毛を八の字にして、少しバツが悪そうに涼子が言う。

「まあ青春の真っ只中にいる少年の憂いている顔も嫌いではないが、どうにも今日は憂いているというよりは、悩んでいるか、落ち込んでいるようだしね」

思い切り凶星を突かれた俺は、何も言い返せずにとだただ蕎麦を
啜った。

「山吹ひかる、または、高坂藍^{こうしかあお}。彼女たちと何かあったかい？ 少
年」

妙に勘繰るでも、いじってくるでもなく、ただ疑問に思ったから
聞いた。

涼子にしては珍しく、そんな感じのする聞き方だった。

「……まあいいさ。君が答えたくなければ、深くは追求しない」

少し返事を待って、俺が答えないと、少し苦笑いをしながら涼子
が言う。

「相変わらず若いな、少年。ま、そこが可愛いところでもあるんだ
けどね」

椅子の上で足を胡坐に組みなおすと、いつものようにおっさん臭
く笑った。

その後は、いつも通りの赤井涼子だったのだが、なんだか俺は口
を開くタイミングを逃してしまい、何も喋らずにいた。

「さて、そろそろお暇しようか」

涼子が殊勝にもそんな宣言をした時には、もう空は暗く、部屋の
灯りだけが世界を照らしていた。

「あ、そうだ少年」

俺が皿を洗っている横で、窓枠に手をかけた涼子が、思い出した
ように振り返った。

「悩めるような事をしたか、悩んでも選びかねる選択肢があると言
う事はいいことだぞ、少年。それがどちらに転んだとしても、絶対
にあとで悩んだ分の何かが返ってくる。そういうもんだ」

そう言っただけで笑いかけると、いつものように颯爽と窓から飛び出し
て、夜の闇に溶けるように消えていった。

相変わらずおかしなヤツだが、いつもどこかで俺の事を理解して
いる。

現に、一番当てられたくない部分を、あの女は容易に当ててきた。そして、いつの間にも先程よりも思い悩んでいない自分がいるのが、あの女のちよつと凄いとこゝろだ。

チクシヨウ。と頭の中で呟きながら、涼子がさつた窓から見上げた空は、痩せ細つた月が片隅でちよこんと座っているだけで、星一つ見えなかった。

「たけのこお！」

教室中に響く声で女子共が騒いでいる。

なんだか話題のゲームをやっているそうなのだが、響いてくるのは筈だの松茸だの山に生えているものばかりだ。

最近の流行は良く分からないが、その真ん中で一番はしゃいでいるのが春日部ちゃんなのも、イマイチよく分からない。

「可愛いなあ……」

それを見てうっとりしているアゴマサについては、理解したくない。

良くも悪くもいつも通りの教室には、相変わらず時間が垂れ流されている。

「目黒。お前もいいと思わないか？」

キラキラと輝く目を細めながら、アゴマサが一切こちらを見ずに話しかける。

「まあ、お前が良けりゃいいんじゃないの？」

無視すると何かと後でうるさいので、適当に答える。

窓枠に腕をかけて眺める校庭は、昼休みを利用してサッカーをしたり、噂の男女が校庭を闊歩したりと、いつも通りの賑わいを見せている。

「なんかさ、お前って寂しいヤツだよな」

相変わらずこちらに一瞥もくれず、少女マンガのトーンに囲まれたような雰囲気を出しているアゴマサが言う。

「何がだよ」

「つまんねーって顔してさ、何かと斜に構えて格好つけてさ、何かこう夢中になれるモンとかないのかよ」

言っている事はひどく真っ当で、俺が一番受けたくない直球の言葉のはずが、全く心に届かないのは、今のアゴマサのうっとりとし

た気持ち悪い表情と、大男が両手で頼杖をついているというイヤ過ぎる光景からであろう。

「無え。ほっとけよ、俺の事なんてよ。お前は春日部ちゃんでも見てりゃいいだろうが」

「そうもいかない。俺はプリントを集める係りだから……」

きのこだのたけのこだの騒いでいた女子たちが散って、ようやく人間らしい顔に戻ったアゴマサがこちらを向く。

「だからなんだよ」

「だから、何が何でもお前に進路を決めてもらわないと困る」

「いいじゃねえかよんなもん。お前が適当書いて出しといてくれよ」

真剣にアゴマサが言うので、鬱陶しくなつて追い払つように手をひらひらとさせて、また窓枠に腕を乗せて外を見る。

「それじゃあ意味が無い。お前の字で、お前の気持ちで書いたものが無いと、集めたことにはならん」

バカ正直でクソ真面目、一本気な男。

何かに執着すると、燃え尽きるまでやるタイプのこの男は、それがたまたま柔道だっただけで、幼少期に惹かれたものが違っても、きつとどの世界でも成功するだろう。

ただし、ドが付く変態だが。

「だったら気長に待つこつたな」

そんな男が真剣な顔で放つ言葉には、フラフラと平凡に生きてきた俺を押しつぶすだけの重さがある。

だから俺は、いつも適当な事を言つてコイツをあしらつのかもしれない。

「気長には待てん。もう提出期限はとっくに終わってるやつだからな。このままじゃ春日部ちゃんへの義理が立たんだろう」

義理、人情とか演歌な台詞を平気な顔で並べて、さもそれが当然と言わんばかりに胸を張る。

古臭い男を地で行くコイツに、苦手意識すら感じる程だ。

ただ、こいつが変態ぶりを発揮している時は、苦手どころか死ん

で欲しいと思っっているが。

「じゃあ義理は当分立たんかも知れんな」

俺はその言葉をアゴマサに投げつけると、早足で教室を後にした。

人気が相変わらずない屋上。

暇な時や、何か考える時、その他色々。俺はよくここで寝転んで空を見上げる。

ふわふわと雲を散りばめた薄い水色の空は平和そのもので、変わらない日常を喜んでいるかのようだった。

そんな空を見上げていても、原因不明のイライラ感が襲ってくる。

「あー！ー！ー！！」

頭をバリバリと掻きながら叫びたくなり、実際やってみても空しなくなるだけで、何も変わらない。

ごろんと寝返りをうつってみても、到底昼寝をするような気分にはなれず。だからといって、今更教室に戻ってアゴマサと話す気にもなれない。

一度も授業をサボったことは無かったが、授業をサボってここでボーっとしていよう。

そう思った矢先だった。

「やつほー！ くーらくくーん！」

ミス・バイオレンス。紅が相変わらずへらへら笑いながら飛んできた。

そう、飛んできたのだ。

「うーっふおえ！」

鳩尾の上に膝から着地をしゃがったこの女のせいで、言葉ともならない言葉を吐いて、ついでに昼飯も吐きそうなまでに追い詰められる。

「どうしたの？ こんなところで、もうすぐ授業始まっちゃうよ？」

俺の上に乗ったまま、小首を傾げて紅が聞いてくるが、フライング・ニードロップが効いている俺は、息をすることすらままならず、

声にならないか細い何かを喉の奥から捻り出していた。

「なんで答えてくれないの〜？ まあいつか。苦楽くんがサボるなら、紅ちゃんもサボってあげる」

ようやく俺の上から退いてくれたものの、俺が床をのた打ち回っている姿を見てのこの回答は、鬼畜とかそういうレベルでは無い気がする。

「……ぜってえ……ブチ、こ、コロスウ……」

俺の口の端からこの言葉がようやく出た頃には、もうチャイムは鳴り、俺たち二人のサボりが確定していた。

「空つてさ、不思議だよな〜」

ようやく俺も回復し、黙って紅と空を見上げて寝転んでいる中、ふと紅が沈黙を破った。

「だって、あるのに無いんだよ？ 雲もそう。あるのに、触れないすり抜けちゃう」

そう言いながら、右手を空にまっすぐ伸ばす。

「そのくせ、すっごく遠いのに、なんだか触れそうな気がしちゃうんだ」

右手をグーパーさせながら、相変わらずヘラヘラ笑っている。

「だからあたし、思うの」

そう言うと、紅は腹筋をする要領で上半身だけ起こし、制服の背中をパンパンと両手で払った。

「悩みなんて、雲みたいなものだし、そこに確かに見えるかもしれないけど、実態は呆れちゃうくらいスツカラカンなのかもしれないよ」

なぜか、そんな言葉を言いながら、俺の方に相変わらずのヘラヘラした笑顔を向ける。

「……だから何だよ」

「なんでもないよ」

なんだかこの女に道を説かれているような気がして、イライラし

ながら聞くと、楽しげにそう答えるから、俺は寝返りをうつて紅が視界に入らないようにした。

こいつはこいつなりに、俺の事を気遣っているのかもしれないが、どうにもそれを受け入れられる程、俺の心は落ち着いていないみたいだ。

空は、まだ遠い 6

「たけのこお！」

教室中に響く声で女子共が騒いでいる。

なんだか話題のゲームをやっているそうなのだが、響いてくるのは筈だの松茸だの山に生えているものばかりだ。

最近の流行は良く分からないが、その真ん中で一番はしゃいでいるのが春日部ちゃんなのも、イマイチよく分からない。

「可愛いなあ……」

それを見てうっとりしているアゴマサについては、理解したくない。

良くも悪くもいつも通りの教室には、相変わらず時間が垂れ流されている。

「目黒。お前もいいと思わないか？」

キラキラと輝く目を細めながら、アゴマサが一切こちらを見ずに話しかける。

「まあ、お前が良けりゃいいんじゃないの？」

無視すると何かと後でうるさいので、適当に答える。

窓枠に腕をかけて眺める校庭は、昼休みを利用してサッカーをしたり、噂の男女が校庭を闊歩したりと、いつも通りの賑わいを見せている。

「なんかさ、お前って寂しいヤツだよな」

相変わらずこちらに一瞥もくれず、少女マンガのトーンに囲まれたような雰囲気を出しているアゴマサが言う。

「何がだよ」

「つまんねーって顔してさ、何かと斜に構えて格好つけてさ、何かこう夢中になれるモンとかないのかよ」

言っている事はひどく真っ当で、俺が一番受けたくない直球の言葉のはずが、全く心に届かないのは、今のアゴマサのうっとりとし

た気持ち悪い表情と、大男が両手で頼杖をついているというイヤ過ぎる光景からであろう。

「無え。ほっとけよ、俺の事なんてよ。お前は春日部ちゃんでも見てりゃいいだろうが」

「そうもいかない。俺はプリントを集める係りだから……」

きのこだのたけのこだの騒いでいた女子たちが散って、ようやく人間らしい顔に戻ったアゴマサがこちらを向く。

「だからなんだよ」

「だから、何が何でもお前に進路を決めてもらわないと困る」

「いいじゃねえかよんなもん。お前が適当書いて出しといてくれよ」

真剣にアゴマサが言うので、鬱陶しくなって追い払うように手をひらひらとさせて、また窓枠に腕を乗せて外を見る。

「それじゃあ意味が無い。お前の字で、お前の気持ちで書いたものが無いと、集めたことにはならん」

バカ正直でクソ真面目、一本気な男。

何かに執着すると、燃え尽きるまでやるタイプのこの男は、それがたまたま柔道だっただけで、幼少期に惹かれたものが違っても、きつとどの世界でも成功するだろう。

ただし、ドが付く変態だが。

「だったら気長に待つこつたな」

そんな男が真剣な顔で放つ言葉には、フラフラと平凡に生きてきた俺を押しつぶすだけの重さがある。

だから俺は、いつも適当な事を言っつてコイツをあしらうのかもしれない。

「気長には待てん。もう提出期限はとっくに終わってるやつだからな。このままじゃ春日部ちゃんへの義理が立たんだろう」

義理、人情とか演歌な台詞を平気な顔で並べて、さもそれが当然と言わんばかりに胸を張る。

古臭い男を地で行くコイツに、苦手意識すら感じる程だ。

ただ、こいつが変態ぶりを発揮している時は、苦手どころか死ん

で欲しいと思っっているが。

「じゃあ義理は当分立たんかも知れんな」

俺はその言葉をアゴマサに投げつけると、早足で教室を後にした。

人氣が相変わらずない屋上。

暇な時や、何か考える時、その他色々。俺はよくここで寝転んで空を見上げる。

ふわふわと雲を散りばめた薄い水色の空は平和そのもので、変わらない日常を喜んでいるかのようだった。

そんな空を見上げていても、原因不明のイライラ感が襲ってくる。

「あー！ー！ー！！」

頭をバリバリと掻きながら叫びたくなり、実際やってみても空しなくなるだけで、何も変わらない。

ごろんと寝返りをうつってみても、到底昼寝をするような気分にはなれず。だからといって、今更教室に戻ってアゴマサと話す気にもなれない。

一度も授業をサボったことは無かったが、授業をサボってここでボーっとしてしよう。

そう思った矢先だった。

「やつほー！ くーらくくーん！」

ミス・バイオレンス。紅が相変わらずへらへら笑いながら飛んできた。

そう、飛んできたのだ。

「うーっふおえ！」

鳩尾の上に膝から着地をしゃがったこの女のせいで、言葉ともならない言葉を吐いて、ついでに昼飯も吐きそうなまでに追い詰められる。

「どうしたの？ こんなところで、もうすぐ授業始まっちゃうよ？」

俺の上に乗ったまま、小首を傾げて紅が聞いてくるが、フライング・ニードロップが効いている俺は、息をすることすらままならず、

声にならないか細い何かを喉の奥から捻り出していた。

「なんで答えてくれないの〜？ まあいつか。苦楽くんがサボるなら、紅ちゃんもサボってあげる」

ようやく俺の上から退いてくれたものの、俺が床をのた打ち回っている姿を見てのこの回答は、鬼畜とかそういうレベルでは無い気がする。

「……ぜってえ……ブチ、こ、コロスウ……」

俺の口の端からこの言葉がようやく出た頃には、もうチャイムは鳴り、俺たち二人のサボりが確定していた。

「空つてさ、不思議だよね〜」

ようやく俺も回復し、黙って紅と空を見上げて寝転んでいる中、ふと紅が沈黙を破った。

「だって、あるのに無いんだよ？ 雲もそう。あるのに、触れないすり抜けちゃう」

そう言いながら、右手を空にまっすぐ伸ばす。

「そのくせ、手を伸ばしたら、なんだか触れそうな気がしちゃうんだ」

右手をグーパーさせながら、相変わらずヘラヘラ笑っている。

「だからあたし、思うの」

そう言うと、紅は腹筋をする要領で上半身だけ起こし、制服の背中をパンパンと両手で払った。

「悩みなんて、雲みたいなものだし、そこに確かに見えるかもしれないけど、実態は呆れちゃうくらいスツカラカンなのかもしれないよ」

なぜか、そんな言葉を言いながら、俺の方に相変わらずのヘラヘラした笑顔を向ける。

「……だから何だよ」

「なんでもないよ」

なんだかこの女に道を説かれているような気がして、イライラし

ながら聞くと、楽しみにそう答えるから、俺は寝返りをうつって紅が視界に入らないようにした。

こいつはこいつなりに、俺の事を気遣っているのかもしれないが、どうにもそれを受け入れられる程、俺の心は落ち着いていないみたいだ。

それから、紅は何も言わずに授業が終わり、俺が屋上をあとにするまで、横で空を見上げながら鼻歌を歌ってみたり、足をバタバタさせたりしていた。

見上げた空は、紅が言うつようになんとか手を伸ばせば届きそうな近さで、俺を見下ろしていた。

空は、まだ遠い 7

「静かにして下さい。藍ちゃんにバレちゃったらダメですから」
帰り道、紅と別れるいつもの歩道橋。

結局帰りまでまとわりついてきた紅と一緒に、今日も歩道橋の上
にいた山吹さんに出会い、高坂藍が「飛ぶ」のを邪魔しないように
釘を刺され、見つかりにくいように座らされた。

「……んで、あいつ何やってんだよ」

「それは見ていれば分かります」

昨日の負い目もあってか、俺は素直に従うも、どうにも高坂藍の
やっていることが気になる。

今日もジャージ姿で汗まみれになりながら歩道橋を這うように上
っている。

もちろん、普段車椅子に乗っている人間が、いきなり階段を上れ
るわけも無く、這いつくばって四、五段上れば、その場で寝そべっ
て休憩し、また気合を入れなおして一段一段、噛み締めるように上
っていく。

「藍ちゃん、嬉しそうでした」

ふと、山吹さんがボソツと呟く。俺は意味が全く分からず「ハア
？」と聞き返した。

「藍ちゃん。我侂なんです」

「んなこたあ見りゃわかる」

俺がそう言うと、フフッと笑って、山吹さんが続ける。

「あの体は生まれつきなんです。だから、周りの人がちやほやして
いたから、藍ちゃん、それが当たり前だと思ってしまう
て……」

少し困ったように、でも昔を懐かしむような山吹さんの視線は、
話しながらも高坂藍から一時も離れない。

「でも、幼いながらに分かってたんでしょね。自分は人より大き

なハンデを背負って生まれて、可哀想だから大人たちは腫れ物に扱
うように接するんだって。だから、ひねくれちゃってますます手が
付けられなくなってしまっ……」

「今と何ら変わり無えじゃねえか」

「そう見えるかもしれません。でも、昔は違う意味でもっと我侭だ
ったんです。何をやるにも人にやらせて、自分は何もやらないでい
て……。だから、私は最初、藍ちゃんが少し苦手でした」

「そこまで高坂藍という人間と接してきてはいないが、少し意外だ
った。」

「昨日の一件も、スーパーでの一件も、高坂藍が自身でやるうとし
た事を手伝おうとしたら怒られた、といった感じだったため、どう
にも人に何かを任せる性格じゃない気がするからだ。」

「でもね、小さい頃に出会ったある人の教えで、変わったんです。
それはもう変わりすぎってくらいに」

「何があっただよ」

「そこまでは秘密です。でも、藍ちゃんって妙に一本気なところか
あるというか、自分でやるって決めたことはやり通そうとする性質
みたいで、周りが見えなくなっちゃうんでしょうね。あの時から、
どんな些細なことでも自分でやると言い出して聞かなくて……」

「そう言いながら笑う山吹さんは、心底嬉しそうだった。」

「それから、藍ちゃんのまっすぐな所が凄く好きになって、こうや
ってお世話係を任せて貰ってるんです。でも、藍ちゃんはお世話係
って言う呼び方嫌いなんで、人に説明するときしか言いませんけど」
「で、で、それが藍ちゃんが喜んだのと何が関係あるの？」

「さっきまで黙っていた紅が突然間から顔を出して聞いてくる。い
きなり藍ちゃんと呼んでいるあたりが、紅らしい馴れ馴れしさ全開
だ。」

「昨日、この方が藍ちゃんを叩いたんです」

「……サイテーだよ、苦楽くん」

「そんな内容があっさり笑顔で言う山吹さんと、当然の反応をして

ジト目でこちらを見る紅。

俺は思う、山吹さんはいつも一言足りない。

「でも、藍ちゃんはその嬉しかったんです」

「……そういう趣味？」

完全に目が点になってる紅と、相変わらず笑顔の山吹さん。

説明の足りない女と、頭の足りない女が折りなす誤解の連鎖に、

俺はもう何も言うまいと口を噤んだ。

「あ、そろそろ藍ちゃん。上りきりますよ」

「やっぱり、わざと辛い事しようとするのって……。趣味の問題？」

息も切れ切れになりながらも、高坂藍は上半身を歩道橋の最上段に乗せ、何度かゼエゼエと息を漏らし、一気に下半身を腕の力で引き上げる。

「はい、お疲れ様」

それに小走りで近づいて、山吹さんがタオルを渡す。

無言でそれを受け取ると、欄干にもたれ掛かって座り、一気に息をハアと吐いてから顔を拭いた。

一頻りタオルで拭いた後に見えた高坂藍の顔は、凄く綺麗で、一瞬目が放せなくなるくらい惹きつけられる笑顔だった。

「ありがと……。ひかる……」

そう言って高坂藍はタオルを山吹さんに返し、欄干に捕まって体を持ち上げようとした。

すがりつくように、無様に、でも一生懸命に、そんな姿が、もう沈みかけている夕日に写されて、やけに眩しく俺の目には映った。

山吹さんはその間、一切手伝おうとせず、高坂藍を見ている。手を滑らせそうになる姿も、辛そうな顔も、こちらがハラハラしそうな事態も、ニコニコしたまま、微動だにしなかった。

そして、一瞬だけだろうか、高坂藍の顔が欄干を少し越えた。それと同時に、力が抜けたのか手が離れて歩道橋の上に落ちた。

高坂藍が苦悶の表情を浮かべようと、座るまでに時間がかかろうと、山吹さんは一切手を出さない。

「ホレ」

だから、俺がやきもきして手を出しちまうくらいに。

「ひゃあっ！」と小さく悲鳴を上げて、高坂藍は俺に両脇を支えられてひよいと持ち上げられる。

「ちょよ！ 何よ！ またアンタなの？ 離しなさいよ！」

振り向いて俺を確認すると、ジタバタして暴れてきたが「落ちるぞ？」と小声で言うと、少し睨んで暴れるのを止めた。

そして、いつも欄干から見下ろしている景色を、高坂藍にも見えるように持ち上げてやる。

「……綺麗」

俺に持ち上げられて、強張っていた体から力が抜けた。

後ろから持ち上げているので顔は分からないが、きつとさっきみたいな笑顔をしてるんだろうな。そう思うと、なかなか降ろせないでいた。

あれから、降ろした高坂藍に物凄く怒られた。

内容も酷いもんで「変態」だの「痴漢」だの「人攫い」だの滅茶苦茶な事を言うので、周囲から白い目で見られてしまい、それを防ぐと高坂藍の口を塞いだら、さらに周りからの目は偉いことになるわ、手を思いつきり噛まれるわで大変な目に遭った。

ちなみに、説明不足の女と、理解力不足の女はニコニコしながら眺めているだけだった。

「じゃあ、私たちはここで」

歩道橋から歩いて五分程度で、大通りから二本ほど外れた住宅街にある小さなアパート。どうやらここが高坂藍の住処らしく、その前で山吹さんが深々とお辞儀をする。

「そうか、じゃ、またな」

そう言っって手を振ると、高坂藍はムスっとした顔でフンと鼻を鳴らしながらそっぽを向いた。

「明日は……。明日はまたスーパーへ行くわよ！ ひかる！」

山吹さんの名前を呼ぶ部分を強調しているが、彼女に呼びかけるには大きすぎる声で言った後、高坂藍は車椅子を器用に操り、踵を返した。

それを見て、俺と紅は少し笑って、歩道橋まで戻った。

「明日も、面白いことがありそうだね」

欄干に手をかけながらそう言って笑う紅に「そうかもな」とだけ返したが、俺の顔は少し綻んでいたのかもしれない。だって、紅が俺を見て嬉しそうにクスクスと笑っていたからな。

いつもの歩道橋から見ると、いつもの焼けるような街。急いで帰る人の群れに、車の渋滞。

どれを取ってもまったく変わらねえ。

でも、自分から見るといつもの日常が、誰かから見ると実は感動的な光景だったりする……。

そう思うと、これから暗くなっていくだけの夕焼けが、なんだかやけに暖かく、綺麗に感じた。

それは、なんだか懐かしい感じで、少しの間俺はこの景色から目が離せないでいた。

空は、まだ遠い 8

「結局さあ、何も分かってないよね」

いつものように、昼休みにアゴマサから逃げ屋上にやってくると、紅が待ち構えていたので、一緒に食事をとっていたら、ふと紅が言った。

「何がだよ」

「ほら、ひかるちゃんが『飛ぶ』って言った意味。結局、飛んでないじゃん」

口の端にソースを付けながら、フォークでこちらを指して紅が言う。

「ああ、確かにな。何なんだろうな」

「ね？ ね？ 気になるよね」

「……んだよ。気持ち悪い笑い方すんなよ」

ニヤニヤと笑いながら、紅がずいと顔を近づけてきた。

「聞きました奥さん！ 今日、スーパーに行くんですって！」

「……あつそ」

「あつそって何よあつそ。なんだか昨日行く気マンマンみたいな感じだったじゃん」

俺の素っ気無い反応に、紅は唇を尖らせて反論する。

さすがの俺も、昨日あそこまで高らかに宣言されたら顔くらいは出そうと思っている。ついでに自分の夕飯の買い物もできるから丁度いい。

しかし、紅はどうやら俺に「行く」と言わせたいらしく、そんな思惑が見え隠れしたら、なんとなく悪戯したくなるのが世の常だ。

「でも『飛ぶ』ってのは気になるな」

「でしょでしょ？ 結局歩道橋からの景色が見ただけでしょ？」

「なのに『飛ぶ』って……。全然関係ないよね」

「……食うか喋るかどっちかにしろ」

なんでもいいが、ポテトサラダを飛散しながら喋るのは勘弁して欲しい。

「ぶ〜。たまに苦楽くんてお母さんみたいなこと言うんだからあ…」

そう言われてからも、紅はぺちやくちやと喋りながらフォークを動かす手を止めなかった。

「それにしても苦楽くん、アゴマサくんの撒き方、上手くなったね」「んなもん上手くても何の役にも立たん」

本日の放課後も、またしても立ちはだかるアゴマサにマトリョシカのように幾重にも封筒を重ねた物を渡して「ここに、書いたの入れといたから」とだけ言っ立ち去った。もちろん、中身なんぞ無い。

非常に好意的な言い方をすれば素直なあいつは、多分今頃やつと自分の愚かさに気づいている頃だろう。

そして、昼から口元にソース付けっ放しの紅に、こんなところでバカ扱いされ、くしゃみでもしているかもしれない。

「さて、こつからだよ苦楽くん！」

なんだかんだ言っている間に、イタチヤの前についた。

鼻息荒く自動ドアをくぐり、戦場に身を投じる紅。まあ、こいつはいつも戦わねえけど。

相変わらず、この時間帯だけは静けさが漂う店内では、マダム達が品物を見るフリをしながら、決戦のときを待ち構えている。

本日の獲物はオーストラリア産牛肩ロース100g68円。

手に入ればすき焼きができる代物に、さすがの俺も制服のポタンを一つ外し、臨戦態勢に入る。

「おお、早くもやる気だね、苦楽くん」

鞆とカゴを紅に押し付けると、徐に準備運動をする。

その時、関係者入り口からワゴンを押した従業員が登場した。

ヤツはワゴンの横にかけてある拡声器を手に取り、手元に忍ばせ

た紙を読む。

「え〜。ただいまより」

そこから先の声は一切誰の耳にも入らない。

走ってはいけないという、マダム達の暗黙の了解の下、限りなく走りに近い歩きで、ワゴンから一メートルの距離で円を作る。もちろん、俺もその例に漏れない。

店員のこのアナウンス終了まで、誰も手を伸ばしてはいけない。これも暗黙の了解だ。

そして……。

「では、タイムセール、スタートです！」

その言葉と共に、弾かれたようにマダム達が動き出し、ワゴンに向かって手が伸びる。

俺も姿勢を低くして、その人波の間を掻き分けるように入り込む。隙間という隙間すらない場所に、自分の体を目一杯滑り込ませ、そしてじりじりと前に進む。

そして、マダム達の間から手だけを伸ばし、前が一切見えない状況下で、手探りでワゴンの中を物色する。

触れた！

そう確信した瞬間に、素早く一本釣りするか如く手を空高く挙げ、人波を押し返して紅の元へ戻る。

「さすがですな！ お疲れ様です」

敬礼しながら待つ紅から買物カゴを奪い取ると、人差し指と中指の間、薬指と小指の間にそれぞれ掴んだ、1パック200gのオーストラリア産牛肩ロースを誇らしげにその中に入れる。

制服のボタンを閉め、鞆を肩からかけた頃には、タイムセールは終わりを迎えていた。

俺のカゴの中には十分すぎる戦利品があり、もう今夜のメニューは決定していた。

「……はい。じゃあこれは没収ね」

しかし、その声と共に、オーストラリア産牛肩ロースは俺のカゴ

から姿を消した。

驚き振り返るとそこには、高坂藍と、山吹ひかるの姿があった。そういえば、俺はこいつらが来るって言ったから来ていたのだ。タイムセールの熱さにやられて、すっかり忘れてしまっていた。

「お疲れ様です」

労う様に、にこやかに笑ってくれるのはいいのだが、俺のオーステラリア産牛肩ロースをなぜ奪った。

「さて、帰るわよ」

俺が声に出して質問するよりも早く、カゴに獲物を収めた高坂藍が、車輪を転がしてレジの方へ向かう。

「おい！ ちょっと待て」

「何よ」

鬱陶しいわね。

振り返った高坂藍の顔にはそう書いてある。俺には読める。そんな嫌悪感を丸出しにされたら、二の句を継ごうにも継げない。

ポカンとしている間に、奴らは会計を済ませて店をでようとしていた。

「……やられちゃったね。苦楽くん」

ポリポリと頬を掻きながら、アハハと紅は笑う。

しかし、俺にとっては笑い事じゃねえ。

善意でやるならまだしも、そう簡単に奪われてたまるか。そう思い、カゴを紅に押し付けて奴らの後を追うべく、脱兎の如く駆け出した。

「え、ちょ、コレ買うの？ 返すの？」

紅が戸惑いながら何かを言っているが、そんなものは無視だ。

「待てコラア！」

叫びながら懸命に走るも、奴らの姿は見当たらない。

どんな魔法を使ったかわからないが、イタチヤを出てすぐにいるはずなのに、どこにもいない。まるで魔法のように忽然と消えてしまっていた。

……しかし、奴らは一つミスを犯している。俺は昨日家の前まで行っているのだ。

つまり、どんな魔法のルートを通ろうが、歩道橋近くのあのアパートに帰ってくることは間違いない。

そこで、待ち伏せすればいいだけのこと。

閃いたら早い。先回りしなければいけない。

靴の紐を結びなおして、全力で駆け出した。

「苦楽くん！ わかんないから一応買っておいただけ……」

買い物袋をぶら下げた紅の声にドブラー効果がかかり遠ざかっていく。もちろん無視だ。

「ちょ、ちよつと……。お、置いてくの、ひどく、無い？」

息も絶え絶えに膝に手を付いた紅が語る。

やたらと目が血走っているが、俺には関係ねえ。

しかし、あのアパートの前で結構待っているが、一向に奴らが帰ってくる気配が無い。

そして、アパートから何気に匂ってくる夕暮れ時の料理の香りが、オーストラリア産牛肩ロースを奪われた痛みを思い出させて、少しセンチメンタルになる。

「ねえ、苦楽くん。もう帰ろうよお……」

少し経って、もう立っているのも疲れ、アパートの階段に座り込んでいた俺に、紅がつまらなさそうに言う。

アパートから匂う香りが、俺に喧嘩売ってんじゃねえかと思わせるが、そこはグツと堪えて「そうだな」とだけ言って、立ち上がった。

「あら、帰るの？」

その声に振り返ると、腕を組んだ高坂藍が、階段の上で見下すように口の端を上げて笑っていた。

「デメエ！」

どうやって戻ったかは知らないが、そんな事は関係ない。一気に

階段を上って詰め寄ろうとする。

「待ちなさい」

高坂藍が急に振り下ろした何かが眼前に表れ、階段の途中でストップする。

こちらに刀の切っ先を向けるように向けているそれは、調理器具。灰汁をとるのに便利極まりないおたまであった。よく見ると、高坂藍はエプロン姿で、調理中丸出しの格好だ。

「……少し、あがっていきなさい」

少し躊躇ってから、小さな声でボソボソとそう言い、高坂藍は踵を返し、素早く一番奥の部屋に消えていった。

「……今、あいつ何て言った？」

一分ほど考えてから、階段の下にいる紅に聞く。

「……あたしも、信じられない」

ソースのついた口をポカンと開けている紅は、心底間抜けに見えるが、この時ばかりは俺も心底間抜けな表情をしていたに違いない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8371x/>

いつか、空を飛ぶ夢

2011年11月22日02時00分発行